

研究タイトル：

# 中島敦作品研究を基にした日本近代文学研究



氏名：	加藤 彩 / KATO Aya	E-mail：	kato.aya@toyota-ct.ac.jp
職名：	講師	学位：	修士(日本文化)
所属学会・協会：	日本近代文学会, 昭和文学会		
キーワード：	中島敦, 日本近代文学, 小説, 短歌, 笑い, 客観性		
技術相談 提供可能技術：	<ul style="list-style-type: none"> <li>・文学作品(特に中島敦作品)の精読を基にした講座や講演</li> <li>・日本近代文学に関する文献等資料調査</li> <li>・国語科目(特に現代文)の教材研究</li> </ul>		

## 研究内容： 中島敦作品の精読を基に日本近代文学研究を行う

日本において主に昭和初期に活動した作家である中島敦による文学作品を起点として、文学研究を進めている。中島敦という一人の作家が創り出した作品を通して、その時代に生きた人々の文化や思想について考察することで、現代に生きる人々へとつながる普遍的な人間性とは何かを追究している。

### 〈中島敦について〉

中島敦(1909(明治 42)年～1942(昭和 17)年)は、漢学を家学とする家に生まれ、漢文教師の父の転勤のために幼少期から各地(千葉・奈良・静岡・京城(現・ソウル)など)を転々とし、東京帝国大学国文学科を卒業後、横浜高等女学校で国語や英語を教えながら小説や短歌、漢詩等を執筆した。晩年には、日本の植民地であったパラオの南洋庁へ赴任し、日本語の教科書を編纂する仕事にも従事したが、帰国後に持病の喘息のため 33 歳で亡くなった。中島が 1942(昭和 17)年に発表した小説「山月記」は、高等学校における国語教材の定番となっている。

### 〈中島敦作品における短歌〉

中島敦は、未発表の歌集を 7 冊遺している。先行研究においては、当時の中島の生活や嗜好が色濃く表れているとして注目され、歌集がほぼ未発表であることや、中島の作家としての本領が散文作品にあること等から、中島自身も歌の詞書きとして書いているように、歌は中島の《戯れ》であると捉えられてきた。

しかし、『和歌(うた)でない歌(うた)』と題された歌集を取り上げ、中島による歌が歌集として編纂されたことに注目し、歌集に編まれた歌同士のつながりや他作品との関係、時代状況を丹念にたどると、中島が意図的に構成した作品としての一面が明らかになる。

漢学者の家系に育った中島は、国文学を専攻した影響から『万葉集』を意識し、戦意昂揚へつながる歌集が量産された時代状況の中で、時局との間合いをはかりつつ歌を詠んでいた。そのことをふまえた上で、中島と同時代の歌人の岡山巖による、近代短歌の連作が「リアリズムの所産」であるという言説を基に考察を進めると、『和歌(うた)でない歌(うた)』の捉え切れない《我》そのものを陽炎のように現出させた作品としての意義が見えてくる。

(「中島敦『和歌(うた)でない歌(うた)』—《我》を廻る歌—」『あいち国文』第 10 号 2016 年 9 月)

### 〈中島敦作品における〈笑い〉〉

中島敦作品については、知識人の苦悩、悲劇性といった面が取り上げられることも多いが、各作品内には〈笑い〉も多く見られる。それらは、フランスの哲学者であるベルグソン(Henri-Louis Bergson, 1859～1941 年)が定義する〈笑い〉や〈おかしみ〉として捉えることができる。中島は〈笑い〉や〈おかしみ〉により、『自我』や『不安』についての思索を、客観的な視点から捉えることが可能になり、小説作品として昇華させることができたと考える。

(「中島敦「過去帳」論—その〈おかしみ〉を廻って—」『愛知県立大学大学院国際文化研究科論集(日本文化専攻編 第 7 号)』第 17 号, 2016 年 3 月など)

### 提供可能な設備・機器：

#### 名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	